

丸文のある古九谷の二作品

中 川 千 咲

さきに本誌二〇七号で「いわゆる祥瑞丸文裝飾のある古九谷について」と題し、そうした裝飾のあるいわゆる古九谷の作品四点を採り上げ、文様について考察し、またそれらを肥前磁に擬する試みをしたこともあった。

ここでは同類の裝飾ながら、その折、別に扱い触れ得なかった色絵山水人物図銅羅鉢と、色絵山水図平鉢の二つの作品について、祥瑞の文様との関連、二鉢の相互関係、いわゆる古九谷の中における位置などについて考えてみることにした。

古九谷と肥前磁の問題は近年盛んに研究が進められて来ているが、一方昨秋より古九谷古窯址の発掘が大々的に行われ、その調査研究によって従来からの疑問点や、諸問題も解明されるところ極めて多いものと期待されている。ただその解明に当たっても、一方いわゆる古九谷の絵付の様相を遺品を通して出来るだけ擲んでおくことも必要と思われるし、これらは異色ある作でもあるし、敢えてこの小論を試みてみた。

ここで扱う色絵山水人物図銅羅鉢(挿図1)(高七糎 口径二六・九糎 東

丸文のある古九谷の二作品

京国立博物館蔵)は見込に舟人と樹、岩、遠山を描き、周囲に幾何文様で填めた丸文を囲らし、外縁には三角繫を带状にほどこしている。見込の画は大體、黄、緑、青で彩り、舟人の衣と樹葉に赤を加え、丸文と、外縁の三角繫は淡い染付で線描し、諸色で彩る。素地に砂のような黒い小さな斑点があり形も歪んでいる。

いま一つの色絵山水図平鉢(挿図2)(高六・九糎 口径三二・七糎 石川中村記念館蔵)は樹、岩に家を前景に遠山と帆船を配し、それを囲んで丸文をめぐらした銅羅鉢と同じ意匠になる。見込絵は黄、緑、青で彩り、樹葉などには、赤を点じ、丸文は淡い染付で線描し諸色で彩るなど、やはり銅羅鉢と全く同じである。器胎がやや薄手で、波状形の縁に口紅をほどこすなどは銅羅鉢より技術の進歩しているのを窺わせる。

この両者に見られる幾何文様で填めた丸文が祥瑞といわれる焼物に見られるものと通ずるところがあり、祥瑞丸文乃至は祥瑞文様と呼ばれている。

まず祥瑞文様なるものについて一応見てみよう。

祥瑞といわれる焼物は茶の湯や懷石の器として作られたもので、色絵

(花鳥葡萄文密柑形水指蓋裏)

挿図3 祥瑞文様 (砂金袋水指蓋表)

様の中でも大
きな役割をな
している。^{註1(挿図3)}
禪文には一
種の華文で飾
ったものが器
物の縁文様や
地文様として
多く用いられ
ており、また

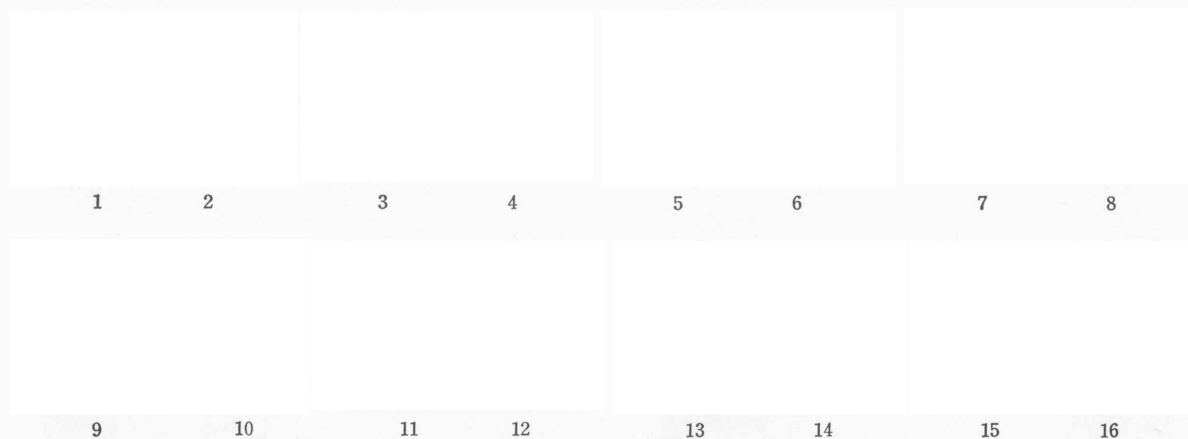
卍を入れたものもある。紗綾形も多く、亀甲文、雷文格子、青海波、菱
つなぎ、毘沙門亀甲、渦つなぎ、七宝つなぎ、石畳文などがあり、他に
一種の楕目文や曲線を並列した独特のものなどがある。これらの中には
古赤絵に見られるものも多い。^(挿図3)

幾何文様あるいは山水図を中に入れ丸文に仕立たものを、器面に連球
のように並べ、あるいは散らして盛んに使っているが、特に祥瑞丸文と
呼び、祥瑞の独特の文様とされている。また格狭間に嵌め込んだものも
ある。

さてこの祥瑞丸文とここで採り上げた山水図銅羅鉢の文様における関
係を見てみよう。銅羅鉢は先に述べたようなものであるが、見込の丸文

(一 関 人 文 鉢)

を見ると、二重になっているのに、祥瑞では幾何文様だ
けで二重の丸文に仕立てているのは捻花文のまわりに一
種の禪文とか、唐草文を廻らしたもので極めて少な
い。この場合銅羅鉢丸文の中の部分だけで見ると、青海
波、華文、捻花文(挿図4文様番号6・9・10)が祥瑞丸文
と同じで、一種の曲線並列文(挿図4文様番号7)が類似
している位である。つまり銅羅鉢には一八個の丸文があ
るが、その内側の丸文は種類としては一五種で、そのう
ち祥瑞丸文と同じものは三種、似ているのが一というこ
とになる。祥瑞でも丸文には仕立てられてはいない他の
文様まで拡げて見ると、卍格子(挿図4文様番号3)、華文
を入れた格子(挿図4文様番号9)が類似するといえ、二
重格子に描点を加えたもの(挿図4文様番号2)、七宝繫の



挿図4 色絵 山水 人物 図 銅羅鉢 丸文

中に十字を抜いたもの(挿図4 文様番号15)は古赤絵に見られるものである。先の卍や華文を入れた格子も古赤絵に用いられている。

丸文の外側の部分では、祥瑞には先に記したように二重のものが極めて少ないし、外側の文様としての同じものとなるとまず見当らない。しかし祥瑞文様全体から求めると、楡目文(挿図4 文様番号3・7・17)、渦巻(挿図4 文様番号6・10・16)、捻花文(挿図4 文様番号5・9)がある。精粗の菊花や蓮弁文、野球のボールを並べたよう

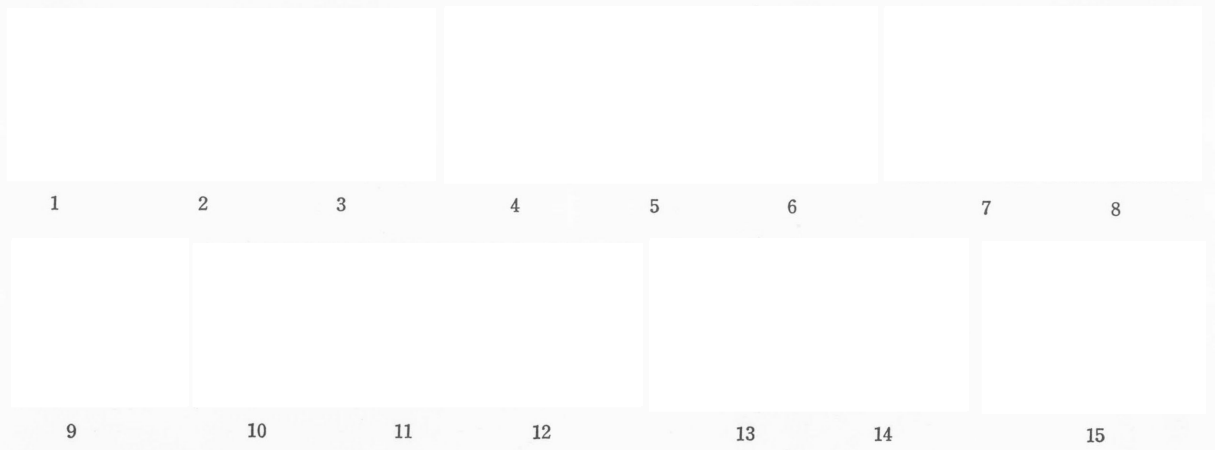
ない。この外側の文様では大体一〇種のうち祥瑞に見られるのは三種だけである。

次に山水図平鉢の方を見るに、祥瑞丸文と全く同じものは無い。各丸文の内側の文様を拾うと、捻花文、青海波、花文(挿図5 文様番号4・6)が祥瑞の丸文と同じで、一種の曲線並列文(挿図5 文様番号7・15)が類似したものといえ、銅羅鉢と同じである。祥瑞でも丸文に仕立てられていない他の文様まで探しても同じものはない。外側の文様では祥瑞文様全体から見ると、楡目文(挿図5 文様番号8・14)、渦巻(挿図5 文様番号4・9)、捻花文(挿図5 文様番号16)が拾える。この平鉢でも祥瑞文様自体は案外少く、いろいろ他の文様を採ったり、組合せたりしたものが多いためである。

こうして見ると、祥瑞丸文に倣っているとはいえないもの、全く同じ二重になったものもなく、内の丸文に同じのが若干と、外側の文様を求めた場合にいくらかある位で、案外少ないのである。幾何文様などで填めた丸文、それを並べた意匠構成などは祥瑞に発するといえるが、個々の丸文については祥瑞に更に古赤絵、その他の文様をまじえ、かなり工夫、変化を加えて仕立てているのが知られる。

17 祥瑞、古赤絵にも求められ
18 な文様(挿図4 文様番号4・13・2)などは

次に二つの作品の丸文について相互の関係を見てみよう。銅羅鉢と平鉢と全く同じ文様を拾うと、内文を捻花としそれに渦巻を廻らしたものが銅羅鉢(挿図4)の文様番号10、16、平鉢(挿図5)では文様番号4に、内文を七宝繋の中に十字を抜き外側を一種の楡歯文としたものが銅羅鉢の文様番号15、平鉢の12に、内側文を曲線の並列とし外を花卉でかこん



挿図5 色絵山水図平鉢丸文



だものが銅羅鉢の1に、平鉢では15に見られる。また銅羅鉢の文様番号4と6の文様を内外それぞれ入れかえると、平鉢の文様番号9と17のものと全く同じになる。

更に内文様か外文様いずれかが同じものは非常に多く、これを銅羅を基に較べると次のようになる。

- 銅羅鉢の文様
- (数字は挿図4の文様番号、「内」は丸文の内側、「外」は外側の文様)
- 1 内
 - 2 外
 - 3 内 (染付) 7、17 (上絵) 同じ
 - 4 外
 - 5 内 外8、15がほぼ同じ
 - 6 内 外 (染付) 10、16 (上絵) 同じ
 - 7 外 3、17同じ
 - 8 内 外 5、15がほぼ同じ
 - 9 内 外 (染付)
 - 10 内 内外16と同じ
 - 11 外 6、同じ

- 平鉢の文様
- (数字は挿図5の文様番号、「内」は丸文の内側、「外」は外側の文様)
- 1 7の内、15は内外同じ (前述3に近い)
 - 2 同じものなし
 - 3 13の外同じ
 - 4 同じものなし
 - 5 6、8 (染付) 14 (上絵) 同じ
 - 6 9の内同じ
 - 7 17の外同じ
 - 8 同じものなし
 - 9 5、12の外同じ
 - 10 6、17の内同じ
 - 11 4 (上絵) 9 (染付) の外同じ
 - 12 15の内同じ
 - 13 6、8、14の外同じ
 - 14 同じものなし
 - 15 12、16の外同じ
 - 16 同じものなし
 - 17 //

12	内	同じものなし
	外(染付)	15、14間の半円(染付)同じ、10の外も似る
13	内	同じものなし
	外	11の外同じ
14	内	2の内同じ
	外	1の外同じ
15	内	12は内外ほぼ同じ(前述)
	外(染付)5、8(上絵)がほぼ同じ	5(上絵)12(染付)の外同じ
16	内	4内外同じ(前述)10の内同じ
	外	6同じ
17	内	9の外同じ
	外	1の内ほぼ同じ
18	内	6、8、14の外同じ
	外(染付)	同じものなし
		3(染付)11が似る

こうして見ると銅羅鉢と平鉢では全く同じものが四、また内側の文様で同じのが九、外側の文様ではそれも厳密にあって銅羅にあって平鉢にないのは二つでほぼ同じである。つまり、全体的に見て両者の文様には同じものが圧倒的に多いし、また内、外側の文様の組合を変えるならば全く同じになるものが可成あることになる。かつ、銅羅鉢、平鉢とも外側の文様内に染付を用いたものが二つおきに配してある。しかもその配列法も櫛目、渦巻、捻花、(平鉢では櫛齒)一種の華文、櫛齒(平鉢では一種の華文)といったようにほとんど同じである点大いに注目される。

両者の違う文様としては内側文様では花枝などを扱った類と、幾何文

様で銅羅鉢のみのものは、挿図4文様番号9の二重格子に中の複雑な角を入れたものだけであり、平鉢だけのものは、挿図5文様番号3の二重格子の隅々に点を描いたような文様と、文様番号8の車輪形のもの二つである。また別に文様番号5、14の銀杏の葉を四つ集めたような特種なものもある。

外側の文様では銅羅鉢の文様番号9、11の如きはつきりした捻花様が平鉢では櫛齒文のようになっており、また別に、勾玉のような文様(挿図5 文様番号2)がある。

銅羅鉢にも平鉢にもいわゆる祥瑞に見られる文様と全く同じものは極めて少なく、祥瑞文様をもとに古赤絵などの他の文様も加え工夫し作られたと見られるものが多い。両鉢の文様の近似はその上に立つてのことであり、しかも極めて濃い関係があり、また野球のボールを並べたような特種の文様まで相方にあることなどからしても、更に、染付の文様、その配置もほぼ同じのを見ると、例えば平鉢は銅羅鉢の文様を基に描いたかも知れぬし、そうでないにしても同じような作品なりを手本として工夫したか、ともかく深い関係にあるのは明らかである。なお銅羅鉢には祥瑞の代表的な文様たる捻花を丸文の外側の部分にもはつきりと使っている(挿図4 文様番号9)のに、平鉢にはこうしたものはないし、細かい線で表わした車輪形(挿図5 文様番号8)や、銀杏の葉を四つ合せた紋章の如き文様(挿図5 文様番号5、14)を描いていることや描法など合せ考えると、銅羅鉢の文様の方が早いのではないかと思われる。

ここでやはり祥瑞丸文で飾った竹双鳥図深鉢に一寸触れておこうと思う。この鉢は先に、本誌二〇七号にて肥前磁に想定したこともあるが、

殊に古九谷古窯趾発掘の進められている際、これを断定する段階にも至っていないので銅羅鉢、平鉢と同類の装飾という観点から少し見ておこう。(挿図6)



挿図6 色絵竹双鳥図深鉢 箱根美術館蔵

この鉢は花形で、見込に竹に双鳥を描き、周囲に丸文を施し、外側には幾何文様の帯をめぐらしている。丸文については銅羅鉢と全く同じものではなく、丸文の内側の文様で同じのは七種、外側文様で六種、また平鉢と全く同じものは二種、内側文様には二種、似たものが三種、外側文様で同じのは八種で、変わった類も多い。丸文においては銅羅鉢と、平鉢の差違より、二者とこの深鉢の差の方がはるかに大きく、また同じ文様でも違ったものでも、その表出はずっと繊細になっている。

丸文のある古九谷の二作品

次に三つの鉢における丸文の描き方を見るに、銅羅鉢では染付で表わされた輪廓線が文様番号16の上に15、17の両方の丸文が重なり合っ



挿図7 色絵松竹梅図皿 東京国立博物館蔵

ているので、区切って描いた場合でも順に描いて行った場合でも最後に描かれたものであろう。恐らく15か17をはじめとして順に並べて描いて行ったと思われる。そして色絵付の場合には16を左上に置いて仕上げていく。それぞれの丸文の中心を結ぶ線は鉢の中心点に合する整ったものである。

平鉢では丸文は正確に対照的になっておらず、それぞれの文の中心線を結んだ場合は中央より左やや下で合する。そして輪廓はやはり染付で文様番号14と15の間に半円の文がのぞいているが、前者の如く丸文一八

七

筒を並べる筈のが、一七個しか並ばず半分余ってしまったためと思われる、染付は14か15番の丸文から描いていったのであろう。色絵付では左やや上にこれを置いて仕上げている。このように両者の丸文の配例には正確にはやや差異はあるが、描きはじめ、あるいは最後までいえる部分で、両者とも色絵付の場合にはほぼ同じ左上に来ているのはまた注目されよう。

深鉢では丸文のそれぞれ対照的なものを結ぶ線はいずれも中心を通り、従って極めて整正された配例になっている。ただ深鉢では右の真中より一つ下の丸文には両方の丸文が重なり合っているので、染付の段階で並べて描いて行った場合最後に描かれたものであろう。いま深鉢をさかさにして、銅羅鉢、平鉢と較べてみると、最後に描いたと思われるこの丸文が、銅羅鉢で終りに描かれたと見られる、文様番号16、平鉢で終りに当る文様番号14、15の間の半丸文と同じ左上に来るのである。即ち深鉢で見込の画を上、下逆に描いていけば、最後の丸文がことに銅羅鉢と同じ位置に来ることになる。銅羅鉢や、平鉢の場合は染付の終りの不出来な丸文を目につきやすい大体左上に無頓着に置いて色を加えているのに、深鉢では不出来な染付の丸文はそれほどでないにしても右下のなるべく目立たぬところにもって来て色絵を施しているという違いがある。

次に見込の絵について見ると、銅羅鉢は岩のそばだった岸に小舟を一艘、岩上には老樹を配して花を咲かせ、上部の空間には突兀たる遠山が描かれている。舟中の漁人が咲きほこる花を、思わず手をとめて振り返りざまに見上げている趣向である。斎藤菊太郎氏はこれを明末天啓に刊

行された「八種画譜」の「五言唐詩画譜」にみえる中唐の詩人張籍の五言古詩「岸花」の絵解きそのままそれを資として作画したものと目されている。^{註2}これと同じ趣向の絵付になるものが柿右エ門の皿にもあり、柿右エ門様式が完成された以後の作風で、初期から中期に移る頃のものが見られている。斎藤氏は同一画稿を手本としながら全く違った二種のものが生まれている点を大きく指摘されているが、同一画稿によるかどうかは別としても、同じ題材を扱っているながら確然たる差異があるのは注目される。

平鉢の見込絵については、岩山の前に家を置き樹を配した前景に、狩野派の風も感ぜられるし、遠山に帆掛船をあしらった遠景には天啓や古赤絵といわれる明末清初の中国陶画に通ずるところも窺われる。その手本と思われるものや、あるいは銅羅鉢のような特別な題材によるものかなどについてはわからないが珍らしい図柄ではある。

両者図柄など全く違うが構図、表現などで、例えば銅羅鉢で大きい方の樹をS字形に表わし、これと交差して、小さい方の樹の上部を直立させたような表現は、平鉢で右から左にくねらせた岩と、これに交差する如く頭部をわずかに直立させてその下をくねらせた岩を配した表現に一脈通ずるものがあるように感ずる。また手前に右から左にくねった岩を置くこと、中景を大きくあけて遠景に山を配する構図、これは中国明末清初の陶画に発すると見られるが、二鉢の場合は全く同じである。こうした点にも二者においてはその丸文と同様近似性を見るのである。

深鉢の見込絵についてはこれらの二鉢との類似は見出しにくい。

裏文様に関しては銅羅鉢は口縁を三角繫でかこむし、平鉢は梅枝を配

しているし、深鉢は、祥瑞にはしばしば使われている華文を入れた襷文を廻らしており、それぞれ異っていて関連性は求めにくい。

さて次にこの三つの鉢、殊に銅羅鉢と平鉢の丸文を中心として、他のいわゆる古九谷の文様との関連を窺ってみたい。古九谷にはここで扱った鉢以外にも装飾様式は違うが丸文のある作があるが、胎土、釉薬などに更に考究すべき点もあるので、この際は一応おく。まず銅羅鉢丸文の

注目すべきものについてみよう。

銅羅鉢では文様番号1の内側の一種の波状文は東京国立博物館蔵の松竹梅図皿(挿図7)にあるが、他にそれ程多くはない。この皿は見込に松竹梅図を描きその周囲に四つの窓を設けて、梅枝と花文様を入れ、地は七宝繫、花文を入れた菱繫、四方襷に丸を入れたものと、この一種の波状文で填めている。胎造りは歪み、肌は不透明な釉調で濁りがあり、黒のポツポツが多く出ている。黄、青、赤、藍彩であるが生溶け調であ

挿図8 色絵山水図皿 同部分

挿図9 色絵鶉図皿 同部分 石川県美術館蔵

挿図10 牡丹蝶図八角皿 同部分

り、素地や釉調、あるいは図柄には、明末の古赤絵に似たところが窺われ、いわゆる古九谷の中でも古様を示すものとされている。古九谷におけるこの一種の波状文は例えば色絵山水図皿(挿図8)や色絵石畳文皿などにも見られる。しかしこれらは複雑な幾何文を多く用いているし、波状文も形式化しているし、古九谷の意匠推移の過程としては後のもの^{註3}と思われる。

文様番号2の二重格子の四隅に線を入れ十字のように表わしたものは、古九谷ではやや複雑な幾何文様を扱ったものに見られるが、古赤絵には類似のものがしばしばある。3の二重格子の中に枠取して卍字を入れた文は複雑なようであるが、古九谷ではうづら図皿(挿図9)や栗人物皿の如く見込絵に重点がおかれ、周囲に比較的簡単な幾何文様をめぐらした類にも用いられている。青海波(文様番号6)も概して前記のような比較的簡単な幾何文様で飾られた場合に用いている。文様番号9の二重格子内に枠を入れその中を一種の華文とした文様は古九谷、古伊万里にはしばしば見られ、簡単な文様のみで構成した装飾の場合には限らないが、祥瑞あるいは古赤絵にはよくある文様ではある。文様番号12の二重格子の中に十字を白く抜いた文様は一見複雑な文様に見えるが、古九谷の場合では白い十字の中に更に木を加えたような複雑なものが多く用いられているのであって、古九谷のこの類の文様としては複雑な文様に入らないし、またこの文様とともに扱われている場合の他の幾何文様も比較的簡単な類である。文様番号15の七宝繋の中に十字を抜いた文様は少ないが、やはり前の文様と同様のことがいえる。

また口縁外周の三角繋の文様は、例えば牡丹蝶図八角皿(挿図10)のよ

うな見込絵にかなり重点がおかれ、幾何文様も比較的簡単なもの、あるいはそれに複雑化した類を加えた作に多く見られ、裝飾性の濃く複雑な文様で填めた類には見られない。

これを総じていうならば、古九谷の幾何文様裝飾の上からは、比較的簡単な幾何文様にやや複雑なものを加えた類に入ることになる。あるいは丸文に仕立た故に、より複雑なものがあったのでないかとも見られようが、古九谷では図案化した緑文様の細かい部分を高度に複雑化した幾何文様で填めている場合が多いので、銅羅鉢の場合はそうした類とは違うようであり、幾何文様の複雑化が未だ最高に達して

いない段階を示しているものと考えた

挿図11 色 絵 石 畳 文 皿

古九谷の皿、鉢の意匠には、一見込に花鳥などをやや奔放な描線で描き、周囲を区劃などして比較的簡單で、明末清初彩磁に見られる類の幾何文様を施した

もの(挿図7)。二 前者のような比較的簡単な幾何文様を主として扱いつながり、それらを複雑化したもの、あるいは新たなものを加え、これら附随文の見込の絵に対する比率が、前者より多くなり、力のそそがれて

いるもの。これらには磁胎作風など前者に近いものと、やや精製されているものとある(挿図9)。三 見込に狩野派風などの絵を描き、縁文様も単に区割したのでなく、いろいろな図案化され、複雑な幾何文様、変ったもので填られ、縁文様の器に占める部分も大きく、見込文様と同じ位

る。これらは古九谷の装飾様式としての大まかな展開も示すものと思われるが、銅羅鉢は二の終りか、三のはじめに属するものと見られる。

平鉢の幾何文様で他の古九谷の文様と関連の見られるのは、ほぼ銅羅鉢のものと同様である。平鉢の文様番号3の二重格子の四隅に二線を加えた類は銅羅鉢には無いが、他の古九谷にはある。それも、先の意匠の

挿図12 裏鉢平図山水山絵色

に力がそそがれているもの。磁胎や作風は概して精製されている(挿図8)。四 全体が図案的構成となっており、見込絵がわずかに影をとどめるか、無いかであり、複雑化した文様、変った文様が更に多くなっているもの(挿図11)に概略分けられ

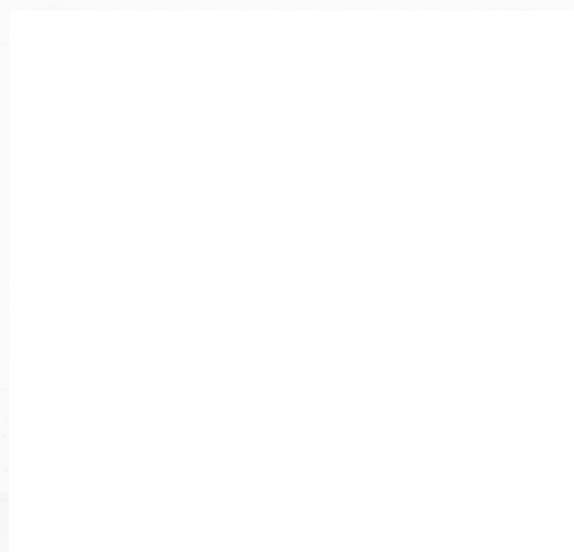
分類における三、即ち縁文様全体が図案化の傾向をとり、幾何文様にも複雑なものが多い類(挿図8)か、四の全体を図案的構成とし、複雑化あるいは変った幾何文様などを更に多く用いた類(挿図11)に見られるのである。

鉢のに近い。いずれも形式は似ており、この文様だけからの古九谷における位置づけはむずかしいが、最も近い台鉢の台の部分には四方禰の中に十字を白く抜き印を入れた古九谷においては複雑な類に入る幾何文様を描いているのが注目される。

ともかく、先に平鉢がその丸文からして銅羅鉢と同類ながらも製作はやや遅れるのでないかと述べたが、さきの二重格子を複雑にした文様の古九谷の中における位置からしても、それはいえようし、裏文様も添え

挿図13 裏鉢台図水仙水菊絵色

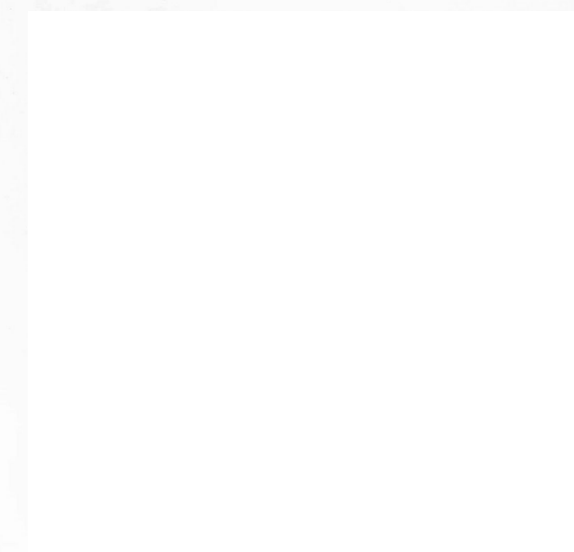
また裏には梅枝文様が三カ所に描いてあるが(挿図12)、古九谷の裏文様には梅枝あるいは梅枝を主とした文様がしばしば用いられている。東京国立博物館蔵の松竹梅図皿、竹吹々鳥図大皿、石川美術館の布袋図皿などあるが、殊に菊水仙図の台鉢(挿図13)のものは平



挿図14 色絵牡丹蝶図捻形皿 同裏 梅沢記念館蔵



挿図15 色絵牡丹蝶図皿 同裏 東京国立博物館蔵



挿図16 色絵亀甲鶉図皿 同裏

て見ると、古九谷の意匠展開からは三期に入り、それも先に述べたことからして銅羅鉢に近い頃の作と考えられる。

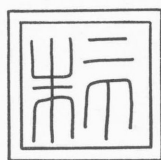
深鉢については、銅羅鉢、平鉢と同じ幾何文様については同様なこともいえようが、重蓮弁、卍字を入れた七宝繫など他の古九谷には見当らぬもの、極めて珍らしいものがある。これらを追うことは広範に亘り、繁瑣でもあり、かつ、ここでは直接的な問題でもないので一応省略させていただきます。

終りに銘について少し触れておこう。銘のあるのは平鉢だけであるが、この銘の読みについては齋藤菊太郎氏は次のように解しておられる。即ち古九谷には変則的な角福銘がいろいろあり、横の劃または縦の劃を増劃あるいは減劃すればいずれも正しい字形に復原され、福字に読み得る文字となるとされ、この場合も偏は隸書の福は示偏であることをやや変形して巾形に作ったものをもとに、上部に同形ものを反転した虫と合字したものであり、作りは畠を減劃したもので、やはり福字の変形と見なされている。^{註4註5}

いまこれと同じような銘を古九谷の中から拾うと、梅沢記念館の牡丹蝶図捻形皿、東京国立博物館の牡丹蝶図皿、箱根美術館の亀甲文鶉図大皿などの名品があり、また東京国立博物館蔵鹿紅葉文輪花鉢のも近いし、小皿向付にはこの手の銘が、わりにあるようである。

梅沢記念館の牡丹蝶図捻形皿(挿図14)は、内外全面に捻った輪花が浮彫となっており、表に大輪の牡丹に蝶を描き、裏は捻形で四つに分け、各区劃に雷文と、中に*を入れた七宝繫を色絵で表わしているが、この

裏文様は祥瑞の代表的意匠によるものである。東京国立博物館の牡丹蝶図皿(挿図15)は捻はないが表にはほぼ前者と同じように牡丹を一杯に描き、蝶をあしらひ、裏には唐草文様をめぐらしている。これらにおいては、文様の上では前者の祥瑞文様と平鉢の文様に関連が求められる。亀甲文鶉図皿(挿図16)は表は全体を七つの亀甲形に割り、中央の亀甲内には桔梗と鶉を、他はそれぞれ中に鶴の丸文を表し、周囲を重ね文様としている。その重ねの各段は七宝、万字、青海波、渦、蓮弁、籠目など数種の文様で填めており、相対する亀甲は同じ装飾法によっている。裏には唐草文様が描いてある。文様の構成、種類、色の対比、調和にも細かい感覚を働かせた作である。これは意匠分類からは四に属するもの、即ち、全体を図案的構成とし、見込絵がわずかに影を止め、複雑化した幾何文様などが多く用いられている類に入る。



牡丹蝶図皿(挿図15)



挿図 17 銘
山水図平鉢(挿図2, 12)



亀甲文鶉図皿(挿図16)

銘も厳密にいうならば牡丹図の二つの皿は同じであるが、平鉢では前者は作りの縦線が三本なのに二本であり、亀甲鶉図皿も作りの縦線一つがまがっている(挿図17)。牡丹図皿の銘を福字の変形とすればその作りは福字の作り上部の縦線下部の横線

を除いた形となり、平鉢や亀甲鶉図皿のものより意のある形といえ、従って平鉢、亀甲鶉図皿はその形の写しくづれと見られよう。

よって梅沢記念館の牡丹図皿は、裏に祥瑞文様をいわばそのまま用いていることや、この銘の違い更に作行など合せて見ると、やはり、平鉢より先行するといえよう。一方亀甲鶉図皿はその裝飾構成、幾何文様の扱いなどからして平鉢より遅れるものであろう。つまり、平鉢は牡丹図皿より遅く、亀甲鶉図皿より早くまた銘が同類ゆえ同じ頃と一概にはいえぬにしても、古九谷に用いられているいろいろな銘を見ると、この場合、それほど時期的差違があるとも思えず、従って、牡丹図皿、平鉢、亀甲鶉図皿も、それぞれ図様の違う割には、製作時もさほどへだたりは無いのではないかと思われる。

以上いわゆる古九谷の祥瑞丸文で飾った二つの鉢について、その丸文を中心として、祥瑞文様との関連、二者の丸文の比較から製作期の前後、他の古九谷遺品との関係から古九谷の中における位置、また銘についてなど、考察してみた。いずれも推察にとどまるし、一方深鉢について、あるいは銘と意匠との関係など広く追求しなければならぬ問題もあり、不備ではあるが、古九谷古窯址発掘とともに必要にせまられているいわゆる古九谷遺品の整理に何らかの役立つところがあれば幸に思う。

註

- 1 斎藤菊太郎「シヨンズイ新論」(祥瑞 昭和四十一年 滴翠美術館発行) 参照
- 2 斎藤菊太郎「古九谷新論」(古美術 二五)
- 3 拙稿「古九谷意匠の一考察」(美術研究 一八〇)

4 斎藤菊太郎「古九谷新論」(古美術 二五)

5 山下朔郎氏は著書「古伊万里と古九谷」の中で、こうした銘を祿字と見なされており、またこの銘のある亀甲鶉図皿、紅葉鹿文皿やその他、中、小皿を挙げて柿右エ門初代の作でないかと推考されている。しかし例に挙げられた作は作行などから見ると直ちには肯定しかねるように思われる。